

悲情の美

震災から一ヶ月後、
私は故郷 相馬の海岸に立っていた。

目の前には、津波にのまれた褐色の大地が
広がっていた。

吉野 弘

いと見上げるとそこには、
さびつらな青空が広がり
遠くで波に反射した光がとびかっていた。

一争う一

青空を仰ぐ人
あのいゝめさが
静かというもの

ふいに日常を断たれた人々の悲痛は
災害の種類や大小に関係はない。

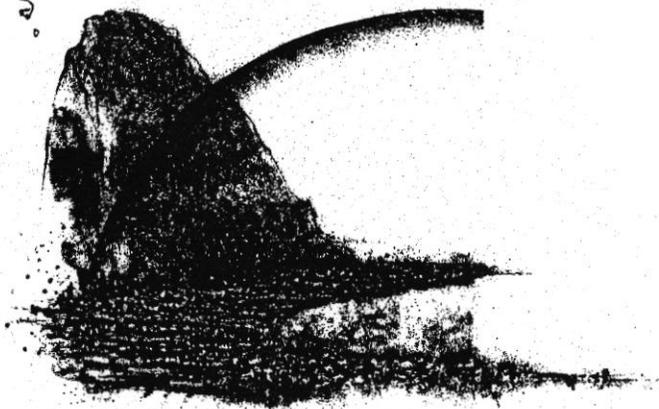
一方で、何事もなかったよつにとこまでも広がる青空。
悲情にしてその美しさに胸を突かれる。

自然の持つ力の脅威と素晴らしさの中にあって
人間も自然界の一部であることと
思い知らされた瞬間であった。

あれから六年

私たち人間は自然の支配に治った
生き方ができるのかど、ウカッ

青空を仰ぐたびにその青さと静けさの中に
このつきつけられた課題が深く横たわっている。



福三子

校長室

だより

ほろろ

ND. 134

平成二十九年三月十日(金)